

Let's TANQ便り

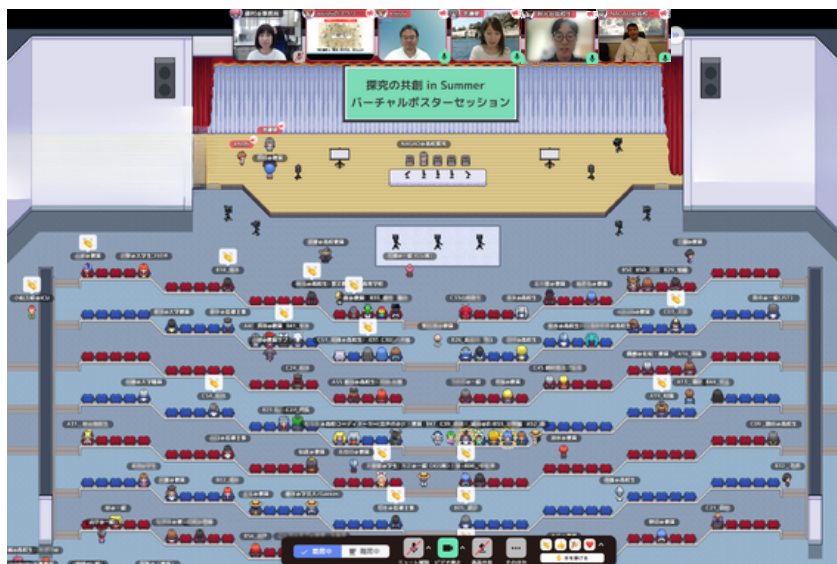
「探究2.0」共創実践コミュニティの拡大に向けたニュースレター



7月20日に、多様な嗜好・志向や得手不得手をもつ人が集う学校教育で行うからこそ実現できる、対話志向で他者に開かれた「探究2.0」をテーマに、「探究の共創 in Summer 2026～バーチャルポスターセッション～」を開催しました。北は北海道、南は佐賀や長崎など、全国各地から57件の多彩なテーマの発表が集まりました。

開会式では、高校探究プロジェクトの西村リーダーが、参加申込時に高校生から寄せられた「探究は自分のやりたいことを本気で追究できる楽しい学びである一方、途中で方向性を見失ったり、何をすればよいかわからなくなったりすること多い」といった声を紹介されました。その上で、探究は成果（プロダクト）だけでなく、試行錯誤を重ねる過程（プロセス）にこそ学びの本質があり、**迷いや行き詰まりは学びが深まっている証であること、教員には答えを示すのではなく、生徒が問いをつなぎ続けられるよう支援する役割が求められることが語られました。**

そして、本日のポスターセッションが、多様な参加者との対話を通して新たな視点や価値観に出会い、「で？」という問いを重ねながら探究を発展させる「探究2.0」の実践の場となることへの期待が述べられました。



開催報告

続いて、成田高等学校（千葉県）3年生の秋元凛太郎さんが開会宣言を行いました。

秋元さんは、探究の共創 in Winter 2024、2025に参加した経験を振り返り、「**探究は、完成した成果を発表するものではなく、途中段階だからこそ対話を通して深めていくもの**」と語り、発表者だけではなく、参加者へもエールを送ってくれました。（下記参照）

さらに、高校探究プロジェクトの特別顧問・長尾篤志先生よりメッセージをいただきました。「高校生一人ひとりが現在の探究の段階に応じて積極的に対話を重ねてもらいたいと思っています。課題設定や調査・考察など、それぞれの段階で多様な人との交流を通して新たな視点を得ることが、探究をさらに深めることにつながると思います。また、**探究は本来『楽しい』学びであり、その姿勢を教科の学習にも広げることで、学びそのものをより豊かなものにできると期待しています。**今日の対話を楽しみ、ぜひ、今後の探究や学びへ繋げてほしいです。」

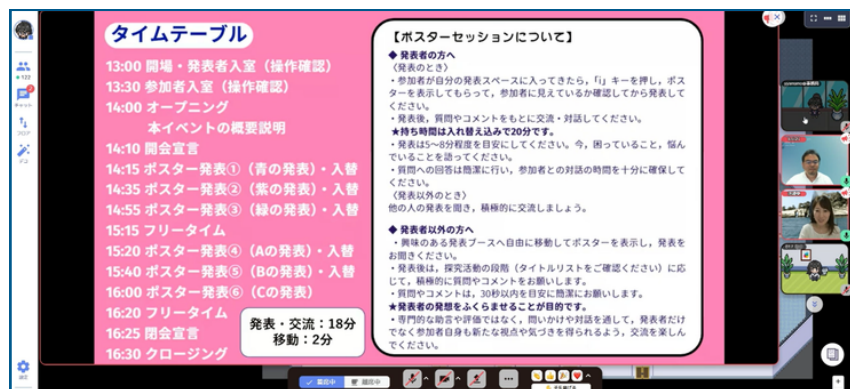
その後、アバターで「覇気」を出したり踊ったりしながら、ポスターセッション会場へ移動しました。

開会宣言

成田高等学校 3年 秋元 凛太郎さん

私は2年連続で「探究の共創 in Winter」という対面イベントに参加してきました。その中で特に印象に残っているのは、完成した成果を発表する場ではなく、今の自分の考えを共有し、対話を通して、さらに深めていくものだという考えです。探究の途中だからこそ、お互いの視点を持ち寄り、新しい気づきを得られます。私は、探究は決して堅く、難しいものではないと考えています。日常の「なぜだろう」と感じたことを自分なりに考えて答えを探していくこと、これこそが探究の原点ではないでしょうか。一方で、探究という言葉に、難しそう、特別なことをしなければならないという印象を持つ人も少なくありません。そのようなイメージを変えていくことが、今、私たちに求められていることだと感じています。

本日のポスターセッションでは、ぜひ発表を評価するのではなく、一緒に考えるという姿勢で参加してほしいです。一つの質問、一つのコメントが発表者にとって次の一歩につながるかもしれません。そして、その対話は、きっと皆さん自身の探究にも新たな視点をもたらしてくれるはずです。本日の交流が参加される皆さんにとって実りある時間となることを楽しみにしています。



探究の「今」を持ち寄り、対話が生まれる そして、新たな視点と出会うポスターセッション

本ポスターセッションが、「発表する場」だけではなく、「対話を通して互いの探究を深める場」となるよう、発表者・参加者のみなさまに、次のようなことをお願いしました。

【発表者のみなさまへ】

- ・20分間の持ち時間の中で、**十分な交流・対話の時間を確保**するため、発表は8分程度を目安とすること
- ・完成した成果だけでなく、**探究の途中経過や悩み、これから考えたいこと、アドバイスを求めたいこと**も積極的に共有すること
- ・原稿を読み上げるのではなく、**自分の言葉で語りかけること**

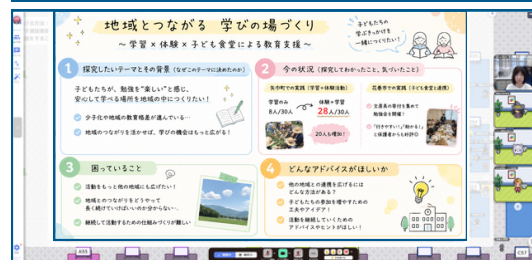
【参加者のみなさまへ】

- ・専門的な助言や評価を行うのではなく、**発表者の発想や問いを広げる**ことを意識して対話すること
- ・「その視点は面白いですね」「なぜそう考えたのですか」「もし○○だったらどうでしょう」といった問いかけを通して、**新たな気づきや次の一歩につながる交流**を心がけること

実際に、探究の成果だけでなく、試行錯誤の過程や今後の課題についても率直な意見交換が行われ、「自分の企画に対する意見や提言が聞けてうれしかった」「他の人の意見をもとに、さらに質の良い探究に仕上げていこうと思った」といった声が寄せられました。また、発表者以外の参加者からも、「全国に探究を楽しんでいる人たちが多くいることを知ることができた」「まだ探究が本格的に進んでいない生徒にも参加する余地がありとても良い機会だった」など、本イベントが学校や地域を越えて学び合う場となっていた様子がうかがえます。



発表ブースの様子



各発表ブースでは、高校生、大学生、教員、研究者など、多様な立場の参加者間で、活発な対話が繰り広げられました。

発表者は、探究の途中だからこそその悩みや迷いを率直に伝え、それに対して参加者が「なぜ○○に着目したの?」「こんな見方もあるかもしれないね」「これからどうしたい?」と問いを投げかけることで、**新たな視点や気づきが次々と生まれていました**。

事後アンケートでは、「自分では思いつかなかった視点をもらえた」「他の人の意見をもとに探究をさらに深めたいと思った」「全国の多様な人と交流できる貴重な機会だった」「探究の途中段階でも安心して発表できた」といった声や、「普段なら出会えない仲間と出会えた」「幅広い年代や専門の異なる方との対話が刺激になった」といった感想が多数あり、多様な人との交流が探究を深めるきっかけとなっている様子がうかがえました。

参加者が立場や地域を越えてつながり、一人ひとりが多様な価値観に触れ、**新たな視点や次の一歩を得る機会**となるなど、「探究2.0」が目指す対話を通じた学びの姿を体感するポスターセッションとなりました。

「探究」に対する捉え方の変容

【高校生の変容】

- ・探究とは、一筋に答えを見つけるものではなく、失敗や経験、アドバイスや支えがあって答えに近づいていくものだとなかった。
- ・1人で突き進むのも大事だが、時には一度他の人の意見に耳を傾け、別の視点から自分の探究を深めることが大切だと感じました。
- ・「やらなくてははいけないこと」ではなく「自分がやりたくてやるもの」、また、「ただ真面目に取り組むこと」から「楽しみながらやるもの」に変わった。

【教員等の変容】

- ・「探究やらなきゃ」から「みんなで面白そうなことを楽しくやろうよ」という感じに変わりました。
- ・「何か指導しなくてははいけない」ではなく、「生徒の知的好奇心をどう刺激できるのか」を大事にしたい。
- ・完成しなくてもいい。思った通りにいなくてもいい。途中途中で疑問に思ったことをいろんな人の手を借りながら探究していくことに意味がある。



「探究」は対話と試行錯誤から、学び方・生き方へ

閉会式では、アドバイザーの山本勝治先生（開智国際大学）と小松万姫先生（国際基督教大学）から、閉会のお言葉をいただきました。

山本先生からは、「発表してくれたみなさんが、探究の過程で困ったり行き詰ったりしていながらも、探究の意義や目的を自分の言葉で語り、専門分野の異なる参加者との対話を通して考えを深めていたことがすごく良くて、刺激を受けました。今後も、『で？』『それで、どうしたいのか』という問いを大切にしながら、**自分が本当に取り組みたいテーマだからこそ生まれる悩みや試行錯誤を探究の原動力として、これからも対話を重ねながらいろいろな人と一緒に探究を楽しみ、学びを深めていきましょう**」と、エールが送られました。

小松先生からも高校生へ激励のメッセージをいただきました。「探究活動の意義はテーマに関する知識を深めることだけでなく、『**学び方を学ぶ**』**ことにもある**と思います。探究の過程で生じた疑問や課題をどのように乗り越えたのかを振り返ることが、その後の学びや生き方にもつながる力になると思います。また、データの分析方法や問いの明確化、研究の継続方法、社会的意義の見いだし方など、探究を通して身に付けた考え方や手法をぜひ大切にして、皆さんの今後の糧にしてほしいです。**一人ひとりの探究が、未来の社会に新たな知を生み出す営みにつながるような流れを一緒につくっていったらいいな**と思っています。」

最後に、西村リーダーが、改めて、参加者に、多様な価値観をもつ人々との対話を通して探究を深めることの意義について問いかけ、本身体感した「探究2.0」を振り返りました。また、**今後は探究を教科の学びと結び付け、多様な教科の視点から課題を捉えることで、より深く多面的な探究へと発展させてほしい**と呼びかけてイベントを閉じました。

終了後には、運営者や参加者がステージ前にアバターで集まり、「覇気」を出しながら、お互いの頑張りを称え合う姿が見られました（上図）。バーチャル空間でしたが、発表や対話を終えた達成感と充実感が会場全体に広がり、笑顔あふれる温かな雰囲気の中でイベントは幕を閉じました。

参加者の声

・もっとたくさんの人と交流をしたいので複数日にわたる開催などがありがたい。教員や大人の意見も、発表側としてとても助かったので、均等に配置するなど**教員陣の人数比が均等になるようにしてほしい**。（高校生）

・年々探究を発表する高校生の視点や気づきに驚くところが多くあります。そのため、質問やアドバイスを行う**私自身も大学内外で様々な「探究」を行い、考え方や視点をアップデートさせて、冬のイベントに参加します**。（大学生）

・生徒さんたちはさまざまな視点を持ち、困っていることを正直に伝え、それを専門領域ではない**大人も一緒になって考えていくという空気がとても好きです**。（教員）

・高校生たちやサポートするみなさんの様子を拝見し、もっと関わってみたいと思いました。**このような場を、私自身も自分の回りでつくっていきたいです**。（指導主事）

・高校生が自分たちから、積極的に質問を投げかけたり、「アドバイスをください」と呼びかけたりする姿が印象に残りました。（一般）

「探究」を軸に、学びの循環を実感

昨年度まで高校生として「探究の共創」イベントに参加してくれていたみなさんが、**今年は大学生となり、高校生を支えるアドバイザーとして活躍してくれたことも、大変うれしい出来事でした**。

これまで対話を通して探究を深めてきた経験を生かし、今度は高校生の問いに寄り添い、新たな視点を投げかける姿は「探究の共創」が目指してきた学びの循環そのものでした。

「探究」を通して育まれた学びが、**次の世代へと受け継がれ、立場を越えて互いに学び合うコミュニティが少しずつ広がっていることを実感した**、印象深いイベントとなりました。

「探究2.0」の共創

「探究2.0」の実践は、一度のイベントで完結するものではなく、多様な人との対話を重ねながら育まれていくものだと考えています。

次は、2026年12月20日（日）に「探究の共創 in Winter 2026」を東京学芸大学芸術館・アクティブラーニングセンターにて対面開催します。

今回ご参加いただいたみなさまとも再び対面でお会いし、新たな共創が生まれることを楽しみにしています。

高校探究プロジェクト

探究の共創 in Winter 2026

12月20日（日）開催

東京学芸大学 芸術館・アクティブラーニングセンターにて対面開催です！
午前：ポスターセッション／午後：ワークショップ
※今年度は「午前・午後セット」でのお申し込みとなります（昨年度からの変更点）

